



フランス シャトーヌフ・デュ・パプ

フランスにて(アヴィニオン近郊のワイン産地)

2009年12月09日 14時51分06秒 | [Weblog](#)

ワイン機器・資材の展示会のために南仏モンペリエに来ていることをこの前書きましたが、今回はその続編。せっかくここまで来たのだからワイン産地を見にいこうと、列車で1時間くらいのアヴィニオン(教皇と、壊れた橋で有名)まで行って、その近郊のシャトーヌフ・デュ・パプ(最近、とみにワインの評価が高い)にいきました。

「ブドウ畑は石だらけ」とは聞いていましたが、聞きしに勝るとはこのこと。



場所によってはこの通り、土は全く露出してない。いったいどうやってブドウの樹を生やすことができたのか不思議。



いわく、「石の蓄熱効果と、その熱を受けるためにごく低く刈り込んだ樹勢、それがこの地域のワインのキャラクターを作っている」、とのこと。

こちらは、シャトーヌフ・デュ・パプの西隣のタベルの畑。「石だらけ」は同じながら、種類が石灰質に変わって白くなっています。



これだけの石を見せられると、やはりこの地域のワイン特性への石の影響を思わずにはいられません、実のところはわかりません。なお、雨上がりの畑を歩いてみると、ズブズブと石ごと足が入る「ぬかるみ状態」で、決して水はけがよいわけではないように思いました。（先月発行した当社の「酒うつわ研究」誌に、酒類総研の後藤奈美さんがテロワールについて書かれていますのでお読みください。）

こちらは、シャトーヌフ・デュ・パプの某有名シャトーの軒先。日本と違って、有名ブランドでもボトリングラインを持っていないところは多く、このようなモバイルの請負企業がやってきて、壺詰め作業を請け負います。



こちらはモンペリエの展示会に出展していたモバイル・壺詰業者。複数の企業が展示しており、相当需要があるようです。ワイン生産者にとっては設備投資を抑えながら「シャトー元詰め」を表示できるメリットがある。日本では法律上問題もあるでしょうが、清酒や焼酎

もこのようなやり方になる時代がくるかもしれませんね。



「シャトー元詰め(mis en bouteille au chateau ミ・ザン・ブテイユ・オ・シャト)」とは、フランスワインのキャップシールに昔からよく表示されている言葉。一方、日本のお酒の王冠でも「蔵元直詰」という表示が昔からつかわれていますが、もともとこれはフランスワインをまねたものなのでしょうか？ それとも日本とフランスで独自に使われ、偶然同じ表現になったのでしょうか？

喜多常夫（代表取締役）